

北川一栄先生を憶う

工学院大学生産機械工学科 矢部 眞

前会長 工学博士 北川一栄先生がなくなられてから満1年を迎えようとしている。この間、貿易不均衡、石油値上げ等ますます厳しくなる一方のようだ。観察眼が鋭く、その結果を実務に応用して成功を収めることがお上手。しかも、豊かな国際体験をおもちの先生が、今生きておられたら、どういうお知恵を出されることだろうか？ うかがってみたいと思う今日この頃である。

先生には昭和51、52年度の本学会会長をしていただいた。創立20周年記念事業を中心として、事務局改組、関西会員のご指導を実に几帳面にやっていただいたとか。

先生と筆者は会長と一会員の関係でしかない。先生にお目にかかったのは3回きり。しかも、初めの2回は時間にして10分までになっていない。第3回は約7時間随行してお話をうかがうことができた。こんなに短い間に実に有益なお話を数多くして下さった方は55才(当時)の筆者としても初めてであった。体験、洞察眼、“正に先生73才の人生のチエ”ともいうべきお話である。筆者1人が蔵しておくことはもったいない。広く学会会員にお知らせしたいと思い、敢えて筆を執った次第である。

第1回は昭和51年秋の大会の特別講演のあとで、講演者に会長として謝辞を述べられた時。第2回は関係している足利工大(経営)の公開講義のための打合せ。総会の後のことである。

ご高名な方と存じ上げてはいたものの、略歴いただいてびっくりした。いかに、出身学科、居住地の差とはいえ、うかつだった。足利工大の教員の中によく存じ上げている人がいて、ご講演の準備が着々と進められた。すなわち、民放ラジオ、新聞などで報道された。

さて、日取りは先生のご都合で決まった。昭和53年5月25日(木)13:00~14:30となった。たいしたお礼もできないから観光も時間の許す限り組んでみた。

前日夕方、定宿に電話したがおられないと。あるいは当日航空機の1番の後かな？と思って少し早目に東武駅に着く。びっくりしたことに先生ホームにおられた。お顔が真黄色、一目で黄だん——苦しい病気だ——とわかる。旧知の宮田修氏随。えらいことになったとがっかり。先生に遅参のお詫び。開口一番“病気だから宮田君同行認めてほしい。弁当用意されても食べられない、不

悪。観光中止して帰りたい。話はイスに腰かけてもいいか”もちろん全部ごもっとも。明治生れの先生である。“倒れて後やむ”というお覚悟がわかる。一会員との約束を守られご病気をしておして来てくださった！

浅草——足利市間は、急行で1時間20分。路線、足利市の様子、足利工大の歴史など、隣席で説明申し上げた。打てばひびくというお話。すっかり感心してしまった。そのお話を下に記す。

1. 独創性について “白人も日本人もアタマの差はない。入社後すぐ1年間、欧州留学。彼の地で発見したことは白人は日本人のように文献調査からでなく、すぐ実地に入るということだった。”
2. 海外出張の注意 “日本語はアイマイ。白人と交際する時は、しゃべってしゃべってしゃべりまくれ。またORのような分野でも、テイク・アンド・テイクは不可。簡単な資料作成し、ギブ・アンド・テイクでゆけ。白人が〈人間〉という時は、有色人種は除外している。”
3. 老人について “小林宏治会長が〈老人は引っ込め大学の先生はもっと勉強せよ〉と就任のご挨拶は正しい。老人は無責任となりがち。小林君抜群の秀才ですよ。”
4. 勉強のやり方について “幼少時代虚弱だったので勉強しないで済ませる工夫して成功。会社でも勉強会をやったが、家へ仕事をもって帰らなかった。”
5. 技術者として “時代の先取りをする工夫し発明した。今は友人に協力し、農業の工業化を試みているが、実験的には成功した。その野菜は美味ですよ。”
6. トップとして “景気悪くなると人減しはトップの恥。わが社では自分が仕事作っておいたので人減しやしていません。自分は人間関係は下手。大企業でも複数の案に費用/効果をつけて上げてくることはまれ。信用した部下が印ついてないと印つかなかった。信用できる人の発見に時間をとられるのが欠点。”
7. 勉強について “今でも事務系の若手社員とマイコンの研究会をもっている。”
8. 学会について “上手に利用し、自社をPRせよ。”
あっと思ふ間もなく足利市到着。ミニ皇居の“ぼんな寺”を1周して大学へ。開口一番“原子兵器の出現で大国間の戦争はできない。しかし、紛争のタネがなくなったわけではない…”と。終わりまで立ったままで。このお話は地元の両毛新聞に15日にわたり掲載された。

秋は11月17日、島秀雄先生のお話。翌朝の新聞に先生のご逝去。その時刻は島先生のお話の直前。名誉会員になっていただいていたことが心残りである。ご冥福謹んでお祈り申し上げます。